

源氏物語語論

—夕霧造型—承前(一)

目加田 さくを

〔行幸〕 15才—16才

源氏は玉鬘の件で大官を訪う。大官は御文で内大臣を呼びよせる。内大臣は雲居雁に求婚の為と早合点して、「何事にかはあらむ。この姫君の御事を中将の愁ふるにやと思ほし廻すに、宮もかく御世の残り少なげにてこの事を切に宣ひ、大臣も憎からぬ様に一言打出で恨み給はむに、とかく申し返さむ事えあらじかし。……さるべき序あらば人の御言になびき顔にて許してむと思す。御心を差合はせて宣はむ事と思ひ寄り給ふにいとどいなび所ながらむが、又などかさしもあらむとやすらはるゝ、けしからぬ御生憎心なりかし。されど、宮もかく宣ひ、大臣も対面すべく待ちおはするにや、方々にかたじけなし。参りてこそは御気色に従はめなど思しなりて」三條の宮に来る。ところが、夕顔の遺児玉鬘を引きとつて育てゝいたという。内大臣は、源氏からまげて頼むという申し込みを予想④と考え、又⑤と、ためらう片意地な心情に甘えていた。その事は、源氏はおくびにも出さぬ。形勢逆転。内大臣は一人相撲と知り、ぶざまな自己を恥じる外ない。

源氏物語語論—夕霧造型—承前(一)

ハハンと合点する。と同時に「かのつれなき人の御有様よりも見所は優りぬべかりしを猶もあかず思ひ出でられて思ひよらざりける事よとしれぐしき心地す。されどあるまじくねぢけたるべき程なりけりと思ひ返す事こそは有り難き実々しきなめれ」自己抑止・自制する態度を世にも珍しい真面目さと評する。作者は、生真面目な夕霧にとりぐの女性の傍を通り抜けさせる。

〔藤袴〕 16才

玉鬘の許に父の代理で訪れ「空消息をつきぐしう取り続けて細やかに聞え給ふ」ような芸当を何時のまにか覚えたため人夕霧は玉鬘に「蘭ふじばかまを御簾のつまよりさし入れて言いよる。玉鬘が「引き入りつつむつかしと思す」様子を見て、拙い事をしてしまったと残念に思うにつけ、紫上にせめてこのように身近にお声だけでも聞けたらば、と思う。成長するにつれ試行錯誤をしつつ、女性に対して、夕霧の目が開いてくる。

○源氏の相談相手・批判者・忠告者に成長

源氏は玉鬘の尚侍出仕の件について相談する。夕霧は反対。理由(一)宮中には源氏の養女秋好中宮・玉鬘の妹弘徽殿が侍る。二人への君寵は篤くそれに競う事は難い。(二)叔父兵部卿官が玉鬘に執心。そ

れを無視しては御兄弟の仲に軋が入らう、と堂々と反対意見を述べ
る。尤もな理由である。この序に夕霧は、齒に衣きせず、父に糾す。
これも源氏になかった態度である。左大臣・内大臣・葵上系の礼
節義理を重んずる剛直な、「うるはしき心」の血統の遺伝である。

「年頃かく育み聞え給ひける御志をひがまにこそ人は申すなれ。
かの大臣もさやうになむおもむけて大将のあなたさまの便りに気色
ばみたりけるにもいらへ給ひける」と言うと、源氏は笑つて否定し、
父内大臣の考に従うつもりと答えるが、夕霧は追求の手をやめぬ。
内大臣はこう言われたとハッキリ言う。「内々にもやんごとなきこ
れかれ年頃をへてものし給へば、えその筋の人数にはなし給はで
捨てがてらにかくゆづりつけ、おほぞうの宮仕の筋に牢籠せむとお
ぼしおきつる、いと賢く才ある事なりとなむ喜び申されけると確に
人の語り申し侍りしなり」と言つてのける。玉鬘に対する父の態
度は我慢のならぬものである。今や夕霧は父のぶざまな態度の批判
者・忠告者へと成長した。これは即、源氏自身の理性、まめ心の声
である、夕霧は実は、そのような存在なのである。（この事につい
ては後述）

眞木柱 16才—17才

巻末、弘徽殿女御の御殿に殿上人が集つて演奏の折「宰相中将も
よりおはして例ならず乱れて物など宜ふを人々珍らしがりて「なほ
人より殊にも」と愛づるにこの近江の君が臆面もなく歌を詠みか
けると、「奇るべなみ風の騒がす船人も思はぬ方に磯伝ひせず」と、
ピシヤリと断る。k女房と物いいうのさへ珍しい堅物青年、強面で

ある。

青年期（梅ケ枝18才〜20才……若菜上下20才〜26才 柏木横笛
28才 夕霧29才）

梅ケ枝 18才の春三ヶ月、六條院

◎名筆—夕霧の才能— 源氏の生涯で幸福の絶頂、太政大臣、栄
華の極に達した時期、姫の裳着、春宮入内も近い。その支度に香・
書卷・調度が調製され、天下の名筆達に依頼される。「高麗の紙の
薄様だちたるがせちになまめかしきをこの物ごのみする若き人々試
みんとて宰相の中將、式部卿官の兵衛督、内大臣殿の頭中將など
に草絵歌など思ひ〜に書け」と依頼。源氏が特に依頼した兵部卿
官、右衛門督などの書には批判的評がなされるが、「宰相中將のは
水の勢ゆたかに書きなしそ〜けたる葦の生ひさまざま難波の浦にか
よひて此方彼方いきまじりていたうすみたる所あり。又いといかめ
しうひきかへてもじやう石のた〜ずまひこのみ書き給へるひらもあ
り。目も及ばず。これは暇いりぬべき物かなと興じ給ふ」と讃辞を
列ねる。夕霧は書畫にも造詣が深くっており、若手随一の名筆と
いう所遇。

◎恋（雲居雁との恋の経過）—内大臣と夕霧の意地比べ—

源氏は進展しない夕霧の恋を案じて他の縁談をもち出してみる
が、夕霧は「物も聞え給はずかしこまりたるさまにてさぶらはせ給
ふ」返事しない。頑なに雲居雁との恋を貫く意地を源氏の前で見せ
る。

内大臣は夕霧に中務官家からの縁談があると聞き驚愕。源氏の申
し入れを頑なにきかなかった事への反省と、きりとして折れて出るの

は見つともないと思う。意地は張り度し、娘はいじらしし、と剛直な大臣が「涙を浮けて」愚痴を言う。「如何せまし、なほや進みいで、気色をとらましなど思し乱れて」娘の部屋を出るしまつ。

夕霧は内大臣が「かくすここしたゆみ給へる御気色を宰相の君は

聞き給へど、しばしつらかりし御心を憂しと思へば、つれなくもて

なししづめて、さすがに外様の心はつかうべうもおぼえず。心づか

らたはぶれにくき折多かれどあさみどり聞えごちし御乳母共に納言

になり昇りて見えんの御心深かるべし」。内大臣がとつた態度への

反感、乳母が放つた侮辱の一語「ものゝはじめの六位宿世よ」は許

せない。納言姿を乳母共に拝ませねば、と恨みは深い。④平気を装

つて故意に一寸もいらつく風のない態度をとり続ける。⑤内心は他

の女性との結婚など考えもせぬ。⑥実のところ、冗談ぢやあない、

辛いと思う折も屢々。しかし我慢するのは屈辱への意地である。

実は内々で文通は続けていた。この底意地のわるさ、意地の強さは、

源氏譲りであると同時に、左大臣家の理性的な、我執の強さ（伯

父内大臣がもつ）が加わって、つまり、父母双方の頑なに意地を通

す素質が、環境的に、六位のままで一室に籠って勉強させられた苦

渋の日々が、我慢強さ、意地を一層培つたのである。従つて、若い

夕霧は単純な頑固者伯父内大臣の敵ではない。源氏も内大臣も、も

早齒が立たなくなつていた。この青年の意地のすがしさを作者はこ

よなく愛したようである。内大臣と夕霧との意地の張りあいを屢々

形成してゆくからである。それも、内大臣が時の経過につれ、より

不利により不様に形成される。既にこの勝負はついている。内大臣

の完敗である。内大臣は泣いた。弱者強者、立場が入れ替つた。面目は潰れても娘の為に夕霧に折れねばなるまいか、と内大臣は焦る、という風に作者は逐いつめる。

藤裏葉

18才 結婚①②

①夕霧の自省 「わが心ながら執念きぞかし。あながちにかう思

ふ事ならば関守のうちもねぬべき気色に思ひ弱り給ふなるを聞きな

がら同じくは人わろからぬ様に見果てむと念ずるも苦しく思ひ乱れ

給ふ。「納言になり昇りて見えむ」の決意もゆらぐ。内大臣も折れ

ているというに、我ながら自分の意地つ張りに呆れる。が、まだ行

動に出ぬ。一言詫びを言わせねばと、ぎり／＼の所で踏み留る。

②内大臣詫びる。結婚。「なほ負けぬべきなめり」と決意すると、

恰好の機会到来。大宮の忌日法会の三月廿日、夕霧の袖を引き託を

いう。「などいとかよなくは勘じ給へる。今日の御法の会にも尋ね

思さば罪を許し給ひてよや。残り少くなりゆく末のよに思ひ捨て給

へるも恨み聞ゆべく」、傲岸な大臣の面目もなく愁訴。四月一日藤

花の宴に招待。結婚。内大臣は婿君を絶賛する。「覗きて見給へ。

いと警策にねびまさり給へる人なり。用意などいと静かに物々し

や。鮮やかにぬけいでおよすけたる方は父大臣にも優り様にこそあ

めれ。かれは唯いと切になまめかしく愛敬つみて見るに笑ましく世

の中忘るゝ心地ぞし給ふ。公さまは少しはれてあざれたる方なり

し。……これは才の際もまさり心用の雄々しく健かに足らひたりと

世に覚えたり」源氏は魅力的で美男、色好で官吏としては少しだら

けてる方、夕霧は学問も父以上、官吏としての判断力がしっかりし

ており背骨があつて満点と世間で評価されている、と手放し礼讃。源氏世界で源氏以上、という。これは注目に価する。たとえ我田引水としても（後述）。源氏の結婚は桐壺の巻末で、さつとかたづけられた。夕霧の結婚については、少女、玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・梅ヶ枝・藤裏葉と十一巻にわたつて、その過程が纏々、丹念に形成される。このような結婚の取扱方は外にはない。作者は夕霧の恋の芽生えからその成就にいたる全過程に並々ならぬ興味と価値を見出しているのである。後の恋には又、柏木・横笛・夕霧と三巻かける。真面目人間の恋は又、藤典侍の場合も記しつけておく。所生の子の資質までも。妹明石姫入内、源氏は准太上天皇、夕霧は中納言に昇進。舅は太政大臣に。夕霧活躍の晴舞台が着々としつらえられた。

若菜上 18才〜20才

朱雀院が出家に際し、女三宮の婿選びをする際、第一候補として目をつけたのは夕霧。「二十にはまだ僅なる程なれどいとよく整ひすぐして容貌も盛に匂ひていみじく清らなるを御目とぞめて打ちまもらせ給ひつゝこのもて煩はせ給ふ姫宮の御後見にこれをやなど人知れず思しより」院のそれとなく打診の意向に気付きながら、さらに受け流す。それは「女君の今はと打解けて頼み給へるを年頃辛きにつけてつべかりし程だに外様の心もなく過してしを生憎に今更に立ち返り俄に物をや思はせ聞えむ。斜ならずやむごとなき方にかゝづらひなば何事も思ふまゝならで左右に安からずは我が身苦しくこそはあらめなど、もとより好色々々々からぬ心なれば思ひ鑽

めつゝ打出でねど流石に外様に定まり果て給はむもいかにぞや覚え
て耳はとまりけり」という分別からであつた。それが、年甲斐もなく出来ずに、うかと女三宮の降妹を承諾した父源氏は好色癖のせい
で、それが六條院に災いと不幸の種子を蒔く事となる。夕霧は18才
で39才の父も及ばぬ理性と、北方に対する誠意をもつ人間に成人し
ていた。

④右大将の権勢―父の賀主権―

源氏四十賀が、第一玉鬘主権―於南の寝殿放出。第二紫上主権―
於二條院。第三秋好中宮主権―秋の殿で。第四番目は冷泉帝の意を
加えて嫡男夕霧が夏の殿で主権。右大将昇任。「大将の御勢もいと
いかめしくなり給ひにたれば打添へて今日の作法いと殊なり」と権
勢をもつに至る。花散里の殿とて訪う人も稀であつた御殿が、夕霧
大将主権の源氏の賀で、太政大臣・左右大臣・二大納言・三中納
言・五宰相と参列、晴の式場となりえた。今迄疎外されていた花散
里も御装束の係りとなり六條院の行事に参加した。「祿ども大方
の事は」北方雲居雁担当。夕霧は養母、北方、舅、一家を総動員して
父の為に「世をひゞかす」晴の賀を挙行したのである。六條院の立
派な後継者として自他共に許す実力を発揮したわけである。

A

②夕霧の女性批判A女三宮B紫上C雲居雁。「いと若くおほどき給
へる一筋にて上の儀式はいかめしく世の例にしつばかりもてかしづ
き奉り給へどをさ〜けざやかに物深くみえず。女房なども大人々
々しきは少く若やかなるかたち人のひたぶるに花やぎざればめるは
いと多く教知らぬまで集ひ……」B紫の御用意気色のこゝらの年へ

ぬれどともかくも漏り出で見え聞えたる所なし。静やかなるを本として流石に心美しう人をも消たず身をもやむごとなく心にくくもてなし添へ給へること、面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられし、「我が御北方も哀れと思す方こそ深けれ、いふ甲斐あり勝れたるらうく、じさなど物し給はぬ人なり」と比較、批判し、女三宮、雲居雁を冷静に見据えるようになった。女房共に至る迄、その殿の雰囲気凡て、女主人の責任である。紫上を正確に評価し、懂れは募る。

○女三宮立ち姿を柏木にみられる件と夕霧の対応

「大将いとかたはらいたけれど這ひよらむもなか〜いと軽々しければ唯心を得させて打咳き給へるにぞやをら引き入り給ふ……こゝらの中にしるき桂姿よりも人に紛るべくもあらざりつる御気はひなど心にかゝりて覚ゆ。さらぬ顔にもてなしたれど、まさに目留めじやと大将はいとほしくおぼさる……衛門督はいといたく思ひしめりてやゝともすれば花の木に目をつけて眺めやる。大将は心知りに怪しかりつる御簾の透影、思ひ出づる事やあらむと思ひ給ふ。いと端近なりつる有様を且は軽々しと思ふらむかし……かゝればこそ世の覚えの程よりは内々の御志のなきやうにはありけれどと思ひあはせて、なほ用意多からずいはいけなきはらうたきやうなれどどうしろめたき様なりやと思し貶さる」夕霧の④は、六條院の後継者として、まさに堂々たる所置である。⑤⑥は六條院側の代表者としての懸念

源氏物語論 一夕霧造型 一承前(二)

である。夕霧の女性批判の目は進む。

友人としての夕霧は20才、柏木が「源氏が紫上の許にばかりいる」と女三宮を案ずるが、柏木に物を言わせぬやうにし、賢明な友人役を果す。柏木の恋着を封じようとする。「いかなれば花に木伝ふ鶯の桜をわきて時とはせぬ」……と口ずさびにいへば、いであな味気なの物あつかひや、さればよと思ふ。「みやま木に時きだむる鶯のいかでか花の色にあくべき」、わりなきこと、ひたおもむきにやは」といらへて煩らはしければ、ことにいはずなりぬ」

若菜下 20才—26才

①源氏の後継者—六條院の正月十九日女楽に26才夕霧が召しよせられる。「琴は猶若き方なれど習ひ給ふ盛りなればたど〜しからずいとよく物に響きあひて優になりける御琴かなと大将きゝ給ふ」女三宮が上手になった、と夕霧が聞く、というのである。批判鑑識する力があるのである。音楽の面でも源氏の後継者たるに適わしく成長している。「柏子とりて唱歌する」夕霧は「声いと勝れ給へる人にて、夜の静かになりゆくまゝに言ふ限りなく懐かしき夜の御遊」を盛りあげる夕霧。

②源氏と対立—春秋論

凡てにわたって夕霧は成長したとはいえ、源氏の後継者、であった。ところが、春秋論で対立し反論する。

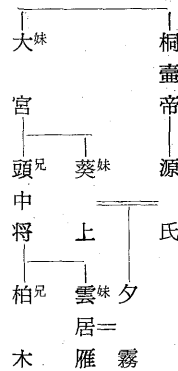
父「心許なしや春の臘月夜よ。秋の哀れはたかうやうなる物の音に虫の声よりあはせたる、ただならず、こよなく響添ふ心地すかし」源氏は秋を支持。

子「秋の夜の限なき月には万の物のとゞこほりなきに琴笛の音も明らかに澄める心地はし侍れど、なほ殊更に作りあはせたるやうなる空の気色、花の露もいろいろ目移ろひ心散りて限りこそ侍れ。春の空のたど／＼しき霞のまより醜なる月影に静かに吹き合はせたるやうにはいかでか。笛の音なども艶に澄みのほり果てずなむ。女は春を憐れむと古き人の言ひ置き侍りける。げにさなむ侍りける。懐かしく物の整はる事は春の夕暮こそ殊に侍りけれ」と夕霧は春を主張し譲らぬ。源氏は古来春秋優秀論は先人も未決着の事と、かわし、論争中止宣言。つまり春秋論では互角、対等である。

③楽才―源氏は当代一流の楽才は誰か、と夕霧に問う。夕霧は太政大臣父子の和琴、兵部卿宮の琵琶と答え、女樂の貴婦人達の才を評価する。源氏に意見を徴される迄に夕霧の音楽の才―(実技・鑑識眼)―のすぐれた事を意味するが、源氏は琴の秘曲の限り習いとおつたが、これを後に「伝はるべき末もなきいと哀れになむ」と言う。夕霧は「げにいと恥かしと思す」というわけで、琴においては源氏を伝承しえなかつた、夕霧楽才の限界である。

④紫上への思慕
紫上の病勢が進み気絶。見舞に訪れた柏木に夕霧は「誠にいたく泣き給へる気色、目も少し腫れたり」、取り乱した姿を見咎められる。「衛門督我が怪しき心慣らひにやこの君のいとさしも親しからぬ継母の御事をいたく心染め給へるかなと目留む」。若菜上では、柏木を見咎めた夕霧、下では、柏木が夕霧を見咎める。若き日の源氏、頭中将さながらの親友、従兄弟、姻戚関係である。この密接に入りこんだ友情関係が二代目時代でも亦同じパターンで繰り返さ

れ、複雑となる。



柏木 27才

柏木、夕霧に遺言―源氏へとりなし、落葉宮の訪らい―

柏木の死後、事情を察知した夕霧は「いみじうともさるまじき事に心を乱りてかくしも身に代ふべき事にやほありける。人の為にもいとほしう、我が身はたいたづらにやなすべき。さるべき昔の契りといひながらいと軽々しう味気なき事なりかし」と思うが、妻にも父にも言わぬ。生真面目で誠実、重厚な人柄の人間になった。

横笛 28才 横笛を源氏にあづける。

夕霧は柏木の死後、誠意を尽す。一條宮で柏木遺愛の笛を贈られるが、夢枕に立った柏木がいう。「笛竹に吹きよる風のことならば末のよながき音につたへなむ、思ふ方ことに侍りき」。六條の院で薫を招きよせて夕霧は、「まなこゐるなどこれは今少し強う才ある様まさりたれど、まじりのとぢめをかしうかされる気色などいとう覚え給へり。口つきの殊東花やかなる様して打笑みたるなど我が眼のうちつけなるにやあらむ。大殿は必ず思し寄すらむ……」柏木に酷似した美貌の幼顔にハッとす。源氏は察知して「いよう、様子をみたいと思ひ、夢語りを伝えると源氏は、「ここに見るべき故ある

物」と言つて預り、^(A)「この君も至り深き人なれば思ひ寄る事あらむかし」と、何も言わぬ。夕霧は思慮ある人物^(B)と源氏に認められてゐるのである。その通り、夕霧は根掘り葉掘り尋ねようとはせぬ。さりげなく柏木の遺言を「深く畏まり申す由を返すく物し侍りし」と伝える。源氏と夕霧は事件についてあらわに話すことをしない。腹芸である。夕霧^(C)27才、もう分別ある壮年に近い。

夕霧 29才 壮年の恋

「まめ人の名をとりてさかしがり給ふ大将」という皮肉な提示で始まる。真面目人間、賢明な高級官僚として政界を闊歩している大將の恋を、あますところなく克明に形成する巻。夕霧の恋には表と裏がある。雲居雁の折も「表はつれなく」構えて内大臣を心配させていたが、裏では雲居雁の許にたえず文を通わしていた。表の恋人雲居雁、裏の恋人藤典侍。柏木未亡人に對しても、
内心：「あらまほしき御有様と心にとどめ：かくてはやむまじく
月日に添へて思ひまゐる」

外面：「昔を忘れぬ用意に見せつゝ懇にとぶらひ給ふ」^(D)
夕霧の反省と分別・作戦

①故人の未亡人を見舞う態度から恋人に豹変は恥しい。
②「深き志を見え奉りて」女二宮が打ち解けるのを待とう。深き志とは具体的に何をさすか。後援者を失つた女二宮と母御息所に対し、物心両面の懇切なとぶらいである。(a)度々の訪問：(母御息所の物淋しきつれづれも慰む)：(b)物質的援助：(小野移転に際して御車、御前駟を奉る。僧の布施・淨衣などやうのこまかなる物をさへ

奉る) — その事の重大性 —

貴婦人の体面と夕霧の物質的援助。この事について考える必要がある。朱雀院更衣であつた御息所にとっては、貴婦人としての体面を保つ事は、命を守るに等しい事である。後で、女二宮と夕霧の關係で悩み、宮に練言を言い、遂に死を早めた事実がそれを証する。貴婦人は自分では何も出来ぬ。一人では外出も出来ぬ。病氣療養の爲、小野へ移ろうとしても小ざつぱりした御車が先づ入用。前駟がいる。祈禱僧らへの布施、淨衣の支度、これらは今迄は婿の柏木が差配した。彼の死後、弟達は寄りつかぬ。朱雀院は退位後出家の身。しかも女三宮を溺愛し二宮母娘の事は念頭にない。後援者がない今日、姫宮は何も知らぬが、母御息所や女房共の最も心を勞するところ。どうしたものか、と思案にくれる間もなく、大將から届けられる。御息所・女房らは「あはれにありがたき御心ばへにもあるかな」と思い知る。貴婦人の品位を保ちえた、救われたからである。

③御息所の加持の間、女二宮に夕霧接近。

○夕霧の口説き——その特殊な多様性(a)~(d)に注目。

「なほかうおぼししらぬ御有様こそ、却りては浅う御心の程知らるれ」(a)と言われることはインテリには致命的。あまりこよなおぼしおとしたるに、えなむ鎮め果つまじき心地し侍る」(b)そんな事はない、誤解だわ、と宮は慌てる筈。(c)は恐喝である。宮は危険を感じる。(d)「世の中をむげにおぼし知らぬにもあらじを」(d)カマトトぶ

るな、とひやかashi、である。(a)人情がわからぬとは教養不足ではないかと言ったり、(b)慌てさせたり、(c)嚇かしたり、(d)小馬鹿にしたり、八方手のこんだ口説き方である。襖一重を必死におさへて隔ての関と身を守る宮に対して、「かばかりのけぢめをと強ひて思きるらむこそ哀れなれ」と打笑ひてうたて心のまゝなる様にもあらず」^(ア)余裕たつぷりの夕霧。世間知らずの皇女を手玉にとるぐらい、何でもないと思つている。うっかり、宮は「我のみや憂き世をしれる例にて濡れそふ袖の名をくたすべき」と口ずさんで、夕霧に「わが心につづけて忍びやかにうち誦じ」られ、しまつたと思う。夕霧は「ほゝゑみ給へる気色にて」詠む。「大方はわが濡れ衣をきせずとも朽ちにし袖の名やはかくるゝ」。柏木との不如意だった夫婦生活——柏木は更衣腹皇女と容貌に不満をもち、しかも死別。皇女という貴婦人二宮に対し、すでに朽ちにし袖、すでに芳しからぬ結婚歴をもつ貴女ぢやありませんか、今更、と野次る。無力の皇女を前に権力者——準太上天皇の御曹司大納言兼右大将は、自己の容姿・才能・地位・権勢に自信をもっている。無理なまねはしない。己が優位に安んじている。そのかみ「六位すくせよ」と侮られた少年の日の恋とは正反對。

④宮の抵抗——秀才の誤算と恋の味わい

しかし、夕霧の口説きは逆効果で、無力とはいへ皇女のプライドが許さぬ。宮は靡かぬ。宮は思う。(1)柏木は官位は高くはなかったが父帝・母御息所公認の結婚。(2)その夫さへ「いとめざましき心のなりにしさまよ」冷淡であった。皇女として侮辱をうけた。(3)夕霧

は無関係の人ではない。小姑の夫である。舅政仕大臣がどう思われるか。(4)世間の誹謗はさておき、父朱雀院がどう思われよう。(5)自分分は潔白であるが世間は何と噂をするであろうか。(6)母御息所が夕霧接近の事を御存じない。聞かれたらさぞ「心幼く」とお叱りをうけよう。宮は必死で「明かさでだに出で給へ」とやらひ聞え給ふ」——抵抗する。

夕霧は唐突な好色振舞は経験がない。宮が気の毒にもなり、軽蔑されても拙いと思ひ朝霧に紛れて出る。^(ア)反省する。「年頃人に違へる心ばせ人になりて、さまゝになさけを見え奉る名残なく、うちたゆめずきゝしきやうなるが、いとほしう心恥かしげなれば、^(ウ)おろかならず思ひかへしつゝ、かうあながちに随ひ聞えても後をこがましくやとさまゝに心乱れつゝ出で給ふ道の露けさもいと所せし」^(イ)(1)理性で奔流のような情念を抑えゝしながら、他方(ウ)宮の意に従つて無理に自重した事で却つて馬鹿をみる事になりはずまいか、の疑念が起る。秀才夕霧が恋に感うこととなる。堅物夕霧は、「かうやうのありきならひ給はぬ心地に、をかしようも心盡しにも覚えつゝ」恋の魅惑と辛気さを味う。少年の日の恋は屈辱と苦渋にみちていた。壮年の恋は恋を「をかし」と味う余裕がある。夕霧の人間の自信がもたらした境地である。(＊意識的行動)

○阿蘭梨の中傷——御息所の気位と怒り

御息所は夕霧の接近を告げられ、阿蘭梨には否定したものの「さる事もやありけむ」と思う。

○女二宮へ紅明の使……「さしもあらじと思ひながら」

○「物も宣はでいと憂く口惜しと思すに涙ほろ／＼とこぼれ給ぬ」
——我が加持の間、人少なな宮に無遠慮に近づいたとは、あまりの無礼、口惜し涙——（夕霧に対し）

○二宮が夕霧に接近された不用意さ、貴婦人失格——（宮へ）

○潔白を世間に訴え証する術もない無力な貴婦人の悲哀

○女房らの不用意——（女房らへ）

(1)少将が事実を告げても御息所は、げんに阿闍梨が後朝の帰りと夕霧の姿を把握し、口外した以上、現時点では世間に噂として流布される事を覚悟せねばと思う。

○女二宮は母御息所に対面しても「物づゞみをいたうし給ふ本性にきは／＼しう宣ひさわやくべきにもあらねば恥かしとのみ」思い、事の実状、わが心情を明瞭に告げて今後の対策を相談する、などという事は出来ぬ。母も強いて事実を明らめない。

行き違い——その(1)夕霧の文

○御息所は「人知れずおぼし弱る御心も添ひてしたに待ち聞え給ひけるにさもあらぬなめりとおぼすも心騒ぎして」「二夜目にもう夜離れとは、」と胸騒ぎしたのである。

○夕霧は「たち返りまでたまはむに事しもあり顔にまだきに聞き苦しかるべしなどねむり給ひていとなか／＼に年ごろの心もとなさよりも千重にもの思ひかさねて嘆きたまふ」状態であった。契ったわけでもないのに続けて訪れては外聞わるかろう、とはやる心を我慢して嘆いていたのである。それが母御息所には反対にうけとられた。

その2——夕霧の歌

源氏物語論——夕霧造型——承前(二)

「せくからに浅きぞ見えむ山川の流れての名をつゝみ果てずは」
この歌は二宮の拒否を野次り、からかう。

御息所は「けざやかなる気色にもあらで、めざましげに心地よがほ」ととる。御息所が期待するやうな、たとえは、「命やは何そは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに」的な熱烈な「求愛」はそこにはない。まめ人で自信家の夕霧には洒落くさくて吐けぬ詞である。——「さらがへりて懸想だち涙を流してかかづらはむもいとうひうひしかるべし」と思う人物。父源氏とは全く異なる。色好源氏が前坊末亡人六條御息所に求婚した当座は熱烈なものであった。ところが、靡かした後、すうつと熱はさめ、六條御息所は外聞を憚り敷き悲しみ生霊となった。葵上の死後、北方所遇を期待したにもかかわらず、新しい愛人紫上が北方におさまる。絶望した御息所は齋宮に同行して伊勢に下向したのである。夕霧は理性的な恋である。皇女とはいえ、貴女は臣下に降嫁し、愛されず、死別した方、おちた名前だ、私と恋をしてもいいではないか、といった、甚だ夢も上手もない言い方である。従って、誇高い皇女の反応が心もとなひのは当然である。たとえ一時のものでも——（女はその事に気付かぬから）——命がけでぶつかる情熱には女心はゆらぐ。夕霧の攻畧が女二宮の心をうごかさないのは当然。しかし、夕霧は二宮と結婚後は、北方として遇した。六條院東町に迎え、三條の雲居雁と二人北方とした。夕霧の恋はこのような実のあるものである。しかし、今、二宮・母御息所にはわからぬ。

その3——御息所歌

今宵訪れぬ。その上、この小馬鹿にしたような、熱のない歌に、御息所はいきどおり、不安にかられる。遂に夕霧の真意を探ろうと御息所が返歌。「女郎花萎るる野辺をいづこと一夜ばかりの宿をかりけむ」

実はこの返歌は甚だ軽卒、大失敗であった。潔白を守った娘であったのに母が「一夜の契」を認めた事となる。その上、夜がれを恨む歌である。病中いかに取り乱したとはいえ、貴婦人として無思慮であった。(げんに後日、夕霧はこの歌を母御息所が許したという証據として扱う。又、御息所自身、この歌を苦にして死を早めることとなる。)——御息所は現時点では、夜離れを恨む。

○夕霧の対応

(a)雲居雁に御文を奪われ返事が遅れる。その事情がいえぬ。

(b)一日遅れたが、すぐに訪れようとする。と坎日、結婚を忌む日に当る。御息所に許され結婚という事になると日が悪い。「なほよからむ事をこそとうるはしき心に」思つて訪問を断念。返歌だけ贈る。(⊗)——地の文の皮肉な表現に注目) 御息所はそれをどううけとつたか。

(a')「よべも」通つて来なかつた夕霧の態度に「忍びあへて後の聞えをもつゝみあへず恨み聞え給ひしを、その返りにだにみえず、今日の暮れはてぬるをいかばかりの御心にかは」と思うと病勢急に悪化。

(b)誇りを傷けられ憤懣やる方ない御息所は、「女郎花」の歌を贈れば夕霧が飛んで来る、と期待していたが、それは見事に外れ、音沙汰なしで、一日すぎ、二日目も暮れ果て、一夜で二宮はあきらめられたか

と不安は募るばかり。そこへ「大将の御文」と聞いて、「今宵もおはしますまじきなめり、心うく世のためしに引かれ給ふべきなめり。何に我さへさる言葉を残しけむ」と思いつめ、御息所は絶え入る。

この熱のなき、不安は的中、娘は夕霧に捨てられたのだ、皇女たる身が世上に悪名を流すこととならう。何で母の自分が軽卒にも「女郎花」の歌を贈るなどという大失策をしかしたか。母は娘を不幸に導く手助をした自己を責め、笑ひ者になる皇女が哀れで絶命する。

(c)「秋の野の草のしげみはわけしかど假寝の枕結びやはせし」——

(二宮の御部屋にはまいりましたが決して契りは結んでおりません)——夕霧は御息所に、宮に対して不埒なまねは決して致しておりませんと真面目に答えた。優等生らしく。

実はこれは、女二宮側には(c)責任逃れの弁解とうつる。既に朝帰りの姿を見咎められ、僧達の口の端にのぼつた今、何をいうのか。踏みつけにして、ということになるのであるが、夕霧本人は気付かぬ。色好ではないまめ夕霧は女側の心の動きを解さぬ。「よ」の常識をしらぬ。心くばり不足、このいきちがいが母御息所を死にいたらしめた。女二宮の心はピタリと閉される。左大臣家系養上の血をひき、人情の機微にうとい秀才夕霧の誤算である。

○再び深き志——物と心

葬式に夕霧の援助、日々のとぶらひ——「淋しげなる念佛の僧など慰むばかりよろづの物を遣はしとぶらひ給」——家司も逃げた二宮家

を取りしきる御甥大和守に早速援助。御息所の葬儀らしく品位を保つ事が出来た。二宮は知らないが一同はホットしたのである。今度も、二宮を取りまく重要な人々が夕霧の「深き志」に感じ夕霧を頼ろうとする。大和守は「ありがたき殿の御心おきて」と喜ぶ。宇治の大君の死後、孤児となった中君に対して、かわることなく薫は物心両面の「とぶらひ」をつづけた。それを、「誠に昔を忘れぬ心ながきの名残さへ浅からぬためしなめれ」と、「あはれ」と中君に思いしらせている。匂宮が六君と結婚し、六條院の華麗を尽した御殿から、二條院に戻る時、中君が案ずる目うつしの淋しい女房達の服装を薫は思いやって、中君をはじめ女房達の服装まで届けさせたのであった。実意のある恋とは、このようなものである、と作者はいう。苦勞しらずの第三皇子である夫の匂宮は、思いもつかぬ。そこどころか、六條院にくらべてここは貧相だな、と思っておとすだけである。後援者のない妻の身の廻りを飾るように命じるのは自分である事を忘れて。皇女腹、準太政天皇の第二子薫は苦勞しらずの貴公子だが、彼の深き志は——亡き大君に対する——遺された妹中君の上にまでも及ぶ、という、作者は殊の外、物質の後援に重点を置く。心深さのメジャーとする。

夕霧の弔問——「涙もろにおはせぬ心強さなれど折のさま、人のけはひなどをおぼしやるもいみじうて常なき世の有様の人の上ならぬもいと悲しかりけり」……

夕霧は源氏と同じくxと評される。yの心境も、夕霧が思い出す祖母大宮の死に際して、伯父大臣の形式的な態度に対し父源氏の真情

溢れる悲しみを、嬉しく思った。源氏も夕霧も幼くして母を亡くした身である。共に気の強い人間だが、人の死に際して人より深く常なき世を「いと悲しと切に」思う、真面目な人間である。

思いがけなく手強な拒否にあつて、「をかし」どころではなくなる。「人の上などにてかやうのすき心思ひいらるるはもどかしううつし心ならぬ事に見聞きしかど、身のうへにてはげにいと堪へがたかるべきわざなりけり、怪しや、などかうしも思ふらむと思ひ返し給へど、えしもかなはず」余裕をもって恋の味を楽しむ境地は永くつづかない。「今迄他人が恋にうき身を變ず姿をみて、もどかしく、正気の沙汰か、と笑つていたが、自分がその身になってやりきれぬ……」夕霧は遂に恋のとりこになつて了う。

夕霧は小侍従に対し、「今は忝くとも誰をかはよるべに思ひ聞え給はむ……いとかく心憂き御気色聞えしらせ給へ……」という。大和守兄妹という女二宮の身辺を守る重要人物二人を納得させて、宮をむりに一條宮に引きもどす。亭主顔で夕顔は一條宮におさまり宮を迎える。小野を出ぬと動かぬ宮を大和守は説得。「更に承らじ。心細く悲しき御有様を見奉り敷きこの程の官仕はたゆるに随ひて仕うまつりぬ。今は国の事も侍り。まかりくだりぬべし。宮内のことも見給へ護るべき人も侍らず、いとたいくしういかにと見給ふるをかくよろづにおぼし営むを……一所やは世のもどきをも負はせ給ふべき。いとをさなくおはします事なり。たけう思すとも女の御心一つにわが御身を取りしたため頼み給ふべきやうかあらむ。なほ人のあがめかしづき給へらむに助けられてこそ深き御心のかしき御おきてもそれにかかるべきものなれ」

貴婦人のアキレス腱、致命的欠陥は、自分の力で生活出来ぬ事なのである。そこを突いて二宮に反省を促す。大和守は女房達に、「あなた方が宮によくいつてきかせぬのがわるい、しなくてもいい事——(夕霧を近づけた事)——はなさっておいで」と叱言をいう。宮は説得

されて一條宮へ戻る。遂に夕霧が一條宮にゐずわつてしまふとなると、靨面、御息所の生前には寄りつかなかつた家司が戻つてあれこれと政所で事務をとりはじめ、一條邸は明るく花やかになる。大將の勢力は今や大したものとなっている。少將に「又かかりとて、かきたえ参らずは、人の御名いかがいとほしかるべき。偏に物をおぼしてをさなげなるこそいといとほしけれ——(二宮に拒否されたというので私がとんとよりつかなくなつたら、世間は二宮が私にすてられたと噂しますよ。そうなら宮が気の毒だ。一方的にばかり考える宮の幼稚な御心がおきのどく)——夕霧は女二宮の態度を幼稚、世間しらす、とやつつける。夕霧がしんから惹かれてゐる宮の奥床しき、しめやかさは口には出さぬ。塗籠の中に入つて宮の傍で口説いても、單衣をかぶつて泣いてばかりゐる宮をみて、(a)と感

じ、「心深(a)くいとほしければいとうたて、いかなればいとかうおぼすらむ、いみじう思ふ人もかばかりになりぬればおのづからゆるぶ気色もあるを、岩木よりけに靡きがたきは裂(b)り遠うて憎しなど思ふやうあなるを、さや思すらむ」(b)と思ひ寄り、雲居雁の敷きをおもひ、「いとあぢきなう思ひつづけらるれば、あながちにもこしらへ聞え給はず敷き明かし給ひつ」とまじめな心である。夕霧が泊つたのをみて、宮は「あさまし」と思つて「いよ〜疎き御気色のまき

るを、をこがましき御心かなとかつはつらきものからあはれなる」——夕霧は「拙らぬ抵抗をなさる」と一方で思ひながら、他方あはれと思ふ。(a)に夕霧の愛の真実さがある。それが二宮の心に伝わる。「故君の殊なる事なかりしだに心の限り思ひあがり、御かたちまほにおはせずと事の折に思へりし気色を思し出づれば、ましてかういみじう衰へにたる有様を暫しにても見忍びなむや」と宮は考へて「恥かし」い。政仕大臣家、父朱雀院の思わく、母の喪中、世上の噂、何れも氣の重い事ばかりで、宮は夕霧になびけない。「夕霧に比べると見劣りした柏木でさへ、自分はハンサムぶつて私の器量がわるいと何かにつけておもつていた口惜しき、それに比べ、私に熱中するこの夕霧の美しさは」と思う。「私ときたら今は一層やつれてしまつてる、夕霧が一時だつて我慢して下さろうか、きつときらわれるにきまつてる、恥しい」もう宮の氣持は夕霧に靡いでゐる、あと一歩である。(つづく)